

---

# 魔女と忍者と旅商人

牧村沙夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔女と忍者と旅商人

### 【Nコード】

N5744Z

### 【作者名】

牧村沙夜

### 【あらすじ】

長い長い戦争が終結した世界。

元忍者の少年イリヤは自分の存在意義を失い、義妹のドミニカに甘えっぱなしの怠惰な毎日を送っていた。そんな彼はある日、魔女と名乗る謎の少女と出会うが。

## 第一話「ちゃんと働かないと」

それは泡沫の夢。

薄暮の空。

山の麓に目を凝らすと見える、あちこちに火の手の上がった故郷の里。

一人の少年が蹲っている道の近くでは、少年も見慣れた馬車が横転し、あちこちで動かなくなった骸が転がっている。

そしてその少年の腕の中では、その身を血で真っ赤に染めた少女が薄く息を継いでいた。

少し雨が降っているのか、出血による貧血で真っ青になった少女の頬にポタ、ポタ、と水滴が落ちる。ふと空を見ると 何故か霞が掛かっている。

少女の呼吸は浅く、身体も冷たい。間もなく死ぬだろう。あの子がここに辿り着くまで保つかどうか。少年の研ぎ澄まされた直感は、冷静にそう告げていた。

なのに、どうして息が詰まるのだろうか。どうして唇が震えて止まらないのだろうか。

少年は血染めの少女にどんな声を掛けるべきなのかも判らず、震えが止まらない唇を噛み締めた。

「……………ないて、いるの……………」

少年の姿を認めた少女は、虚ろな目で微笑んだ。

「……………あ……………」

少女にそう指摘されるまで、少年は自分が泣いているという事に気が付かなかった。

幼い頃から、周囲の安全が確認されるまでどんな状況でも感情を押し殺すようにと叩き込まれたはずなのに。

いや、自分はもうとっくにそんな感情は捨てたはず。

ならば、どうして自分は泣いているのか。

「……あの子の、ことは、おねがいね……」

「……ああ」

少女は息も絶え絶えに、今にも消え入りそうな声で囁いた。

何と答えていいのか分からない。

少年は何時の間にか嘔れ果てていた喉を振り絞り、掠れた声を出して頷いた。

それを見た少女は、何か愁いを帯びたような笑みを浮かべた。

「……さいごに、ひとつだけ、おねがいして、いい……?」

少年は少女の声を聞きながら、彼女の身体から生命力とでも表現すべきものが、急速に抜け落ちていくのを感じていた。

限界は近い。

そのことは、少女もなんとなく分かっているのだろう。

少年は嗚咽を堪えながら、小さく一度だけ頷いた。

ああ、やってやる。

たとえ、あの子が独り立ち出来るようになったら後を追って死んでくれと言われても、少年はそれを引き受ける覚悟を決めた。

「……わたし、を……」  
瞳の焦点が定まらなくなっていく。全身の力がみるみる抜けていく。

こんな状況で声を出すのは、相当な体力の消費を伴うだろう。

つまり少女は最期の時を早めてでも、自分に頼みたいことがあるのだ。

だったら絶対に叶えてやる。叶えてみせる。

しかしその言葉は、少年が全く予想していないものだった。

「……」  
少年は絶句した。

そんな事、当たり前ではないか。

それとも君は、俺がそんな事も出来ない人間だと思っているのか？

少年は胸の内から次々に溢れ出してくる疑問を棚上げし、心に生じた動揺を必死に押し殺して頷いた。

「 ああ。分かった……」

それを聞いた少女は、満足した表情を浮かべて目をゆっくりと閉じた。

そしてそのまま、眠るように息を引き取った。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「 ……か」

ほとんど声としての形を成していない、吐息のような呟きが漏れ出した。

呟いた後で、黒髪の少年 イリヤは、いつものようにその言葉の意味を考えようとしたが、その行為を続けるのは非常に困難だった。

なぜなら、その言葉に答えがあるとは思えなかったからだ。

少年は長い夢を見ていた。

これは一種の悪夢とでも言うべきものだが、別にイリヤの妄想という訳ではない。

この夢の内容は、およそ一年前にイリヤが経験した惨劇をそのまま再現したものである。誇張の類は一切無い。

その時の鮮烈な記憶と、少女が最期に発した言葉の謎が今もなおイリヤの心を蝕み、それが時々夢という形になって現れているのである。

そして古びたベッドから起き上がり、夢の中の「あの子」がいつものように朝早くから何処かへ出掛けていることを確認すると、身に纏った黒いベストの埃を払い、台所へ行って昨日の夕飯の残りである冷たい山菜スープに黒パンを漬して食べながら、朝日に照らさ

れて赤く染まっっていく街を眺めた。

この大陸全土でおよそ200年前から続いていた大陸戦争は、常にその渦中であつた北方の大国であるセント帝国の崩壊と、その帝国を討ち果たした有力な国家間での和平条約によつて終わりを迎えた。

各国は長きに渡る戦乱によつて疲弊しきつた国土や経済の回復に追われ、なおも戦争を続けようとする国は一つも無かつた。

いわゆる平和な時代の到来である。

だが、一つの時代の移り変わりというものは、全ての人間にとつて明確な区切りがあるわけではない。

ある日偉い人に『戦争は終わりました』と告げられたからといって、全てが翌日から新しいものへと切り替わる訳にはいかないのである。

むしろあまりに長く続いた戦乱は、本来異質な行為であるはずの戦争を日常化させ、平和な時代の訪れを素直に受け入れられない者達を数多く生み出してしまふという皮肉な状況を作り出してしまつた。

例えば代々軍需物資の生産を続けて生活してきた武器職人だつたり。

例えば代々駐屯する兵士を相手に商売をしてきた軍事商人だつたり。

あるいはこの少年のように、生まれた瞬間から戦乱の最中でこそ、その力を十全に発揮出来るように「作られた」者だつたり。

戦争がいつまでも続くことを前提に生活基盤を築き上げてしまつた者達。

それは少し前なら誰かに必要とされ、それに誰よりも応えることが出来る存在だったが、平和な時代とあつては無用の長物でしかなかつた。

料理の際に求められる刃物は、剣ではなく包丁であるように。だがそれが分かってても、生まれた時から続けていた生き方を変えるのは容易ではない。

それはもう彼らの血肉になってしまい、身体にも精神にも染みついてどうすることも出来ないものだからだ。

そう、言うなれば彼等は 『時代に捨てられた』のだ。

イリヤは今日も彼女の遺した言葉の真意を掴めないまま、朝の食事を終えた。

そして持て余した時間を潰すため、荷物を纏めて家を後にした。

大陸東部に位置する地方都市ベラトリックス。

通称 ？英雄の街？。

大陸戦争中、軍事拠点としての性質が強かったこの街は、住民が居なくなつた空き家や廃屋には事欠かなかったため、他の国や地方から流れてきた難民がこれらの建物を修繕して住み着く事が日常茶飯事になっていた。

イリヤのような流れ者が街に住みつく事について、元々の住民はあまりいい顔をしないのだが、そういった人間を排斥しようという動きは今のところ起こっていない。

何故なら、ようやく訪れた平和な時代を何とか生きていこうと、庶民の間ではお互いの立場を越えた相互扶助的な意識が芽生え始めていたからだ。

今の世の中は、一言で言うなら戦後の混乱期だ。

各国の領主、貴族、騎士、一部の聖職者などの所領を持つ者達は、その統治体制の再編成に躍起になっており、庶民の生活にはほとんど手が回らない。

そのため庶民は、お互いに協力し合って明日の生活を守るべきである。そんな雰囲気は何処の街でも大なり小なり生まれていた。

少年の住処である廃屋も、この難民街の一角に建っている。

生まれ育った故郷を失ったイリヤは、「あの子」と共に数カ月間放浪生活を送った後、このベラトリックス市内に自然発生した難民街に流れ着いていた。

親や親戚は消息不明である。

一年前に起こった謎の集団の襲撃によって、一族郎党は「あの子」を除いて全員消息を絶ってしまったため、今では生きているのかも死んでいるのかも分からない。

まああの連中がそう簡単に死ぬとは思えないし、自分のように何処かで適当に生きているだろう。ひよっとしたら、この街にも何人が居るかもしれない。

「……はあ」

イリヤが溜め息を吐きながら仏頂面で歩いているのは、その難民街の大通りだ。

人の姿が無ければ廃墟としか言い様の無い小汚いボロ屋の群れが、右にも左にも見渡す限り広がっている。

壁に亀裂が入っていたり、塗装が剥がれているのは序の口で、大穴の開いた壁がそのまま放置されていたり、油脂を塗り込んだ布で天井を代用しているような家がある。天候不良が命取りになりそうだが、その家の主にそんな余裕は無いのだろう。

ただし流れている空気は、廃墟のそれとは正反対だ。

お世辞にも上品とは言えないが、それだけに野生的とでも言うのだろうか、泥臭く活気に溢れた空気が辺りに満ちている。

路上のあちこちでは、木箱や布切れの上に『商品』と呼べるのかも怪しいガラクタや詳細不明の山菜や獣肉等の食料品を並べて売っている人達と、そこで買い物をしている人達で賑わっている。

いわゆる闇市だ。この辺りでは毎日開かれている。

「イリヤじゃないか」

道端に出した椅子に座って編み物をしていた老婆が、道を歩いていたブルーに気付いて声を掛けてきた。名はエニフだったか。姓は



覚えていない。「エ二婆」という呼称がこの辺りの人間に定着しているからだ。豊富な人生経験を活かして、この辺りの様々な問題を仕切っている世話好きのバーサンである。

「あんたは、また、そうやってブラブラしてるのかい？」

「そうかもな」

痛い所を突かれたイリヤは適当に答えた。それを聞いたエ二婆は、やや苛立った表情を浮かべて口を開いた。次の台詞は、大方予想がつく。

「あんたもドミニカちゃんみたいに、ちゃんと働かないと」

「　　そうだな」

毎度毎度余計なお世話だと言いたい衝動を抑えて、イリヤは素直に肯定した。

彼は現在プーターローである。

ついでに補足しておく、彼はたまたま解雇されてしまった次の仕事が無いという訳でもなければ、新たな職に就く為の努力をしている訳でもない。

厳密には街の職業派遣組合所に名前の登録くらいはしているのだが、未だに具体的な仕事をした事は一度も無かった。

強いて言うなら、時々義妹である「あの子」に頼まれるお使いくらいか。

改めて考えてみると、実に口クでもない義兄である。よく愛想を尽かされないものだ。

そんなイリヤであるから、こうやって小言を受けるのもまあ当然と言えば当然なのだった。もちろんそれを聞かされる身としては、堪ったものではないのだが。

「だいたいあんたは　　」

「おーい」

エ二婆が続けて何か言おうとしたところで、背後から知った声が聞こえた。助かったとばかりにそちらの方を向くと、「あの子」が立っていた。

「兄さん。おはよう」

華奢な体つきの少女だ。

小型の獣を思わせるような 活発で悪戯っぽい印象がある。

その四肢は細く、全体的に肉付きが薄い。もちろん不自然な痩せ方をしているわけではないのだが、見方によっては少年のような印象を受ける。幾分控えめな胸の膨らみと、栗色の短髪がそれを助長していた。色気の類はほとんど感じられない。

その眼はやや吊り気味だが、きついという感じではなく、どちらかと言えば愛らしい子猫を連想させるような吊り眼である。

そしてその顔立ち是我が妹ながら 厳密には義妹だが 可愛い。それはイリヤも認めるところである。単純に異性に好かれるというよりも、少し年の離れた人に可愛がられる類の容貌である。

そんな彼女がイリヤの義妹 ドミニカだ。イリヤより二つ年下の14歳。

この闇市で物売りをして、不真面目な義兄との共同生活を支える健気な義妹である。こんな自分には勿体無いぐらいよく出来た奴だ。正直頭が上がらない。もっとも当の本人は、あまり気にしていないようだ。

「おはよう」

「悪いんだけど、いつものお使いを頼んでもいい？」

ドミニカは両手を合わせて頭を下げ、頼み事をする時のポーズを取った。

彼女に食わせて貰っているイリヤに、頼み事を断る道理は無い。

そこまで行くともはや人間失格である。それに「彼女」からも、ドミニカの面倒を見るようにと頼まれている。働かないだけならまだしも、積極的に足を引っ張る訳にはいかなかった。

「 ああ。分かった」

まだ日が昇ったばかりだ。今から行けば、昼頃には帰って来られるだろう。

たまにはドミニカに美味しい物でも食べさせてやるべきだろうが

まあそれは無理な話だ。

「じゃ、行ってくるか」

イリヤはドミニカに手を振ると、踵を返して歩き始めた。

「……しかし、『働く』か」

一旦家に戻って装備を整え、難民街を横切ってベラトリックスの街の南城門に向かったイリヤは、そこを警備している若い兵士を横目で見て、自嘲気味に笑った。

## 第二話「襲わないのか？」

「面倒だな」

イリヤは太い枝を削り出して作った即席の杖を弄びながら溜め息を吐いた。

彼の周囲には荘厳な大樹が無数に生えており、さらに深緑の苔がそれらの大樹を含めて全てを覆い尽くしている風景が広がっていた。大樹の葉で日光の大部分は遮断され、そろそろ昼前の時間だということに、まるでまだ早朝であるかのように暗く涼しい。

ベラトリックス市は、いわゆる一般的な城塞都市だ。

この街は元々小さな盆地だった土地を切り開いて建設された、攻めにくく守りやすい要害の地である。その分、交通の便そのものはあまり良くないのだが、東西南北の大都市とも距離自体は近い要所の地である。長く続いた戦乱は、こうした軍事的機能を備えた都市をいくつも誕生させる契機になったのだった。

そんな訳で、ベラトリックス市の周辺には緩やかな丘陵地帯と、それを取り巻く広大な樹海が広がっている。

特にこの樹海は動植物の実りが非常に豊かなのだが、一歩道を間違えれば自分が何処を歩いているのか分からなくなる魔性の地である。まあ最初からそれを見越して建設されたのだろうが、ともかく樹海に入って遭難する人間は後を絶たない。そういう訳で、猟師や樵夫といった一部の専門職を除けば立ち入る者は殆どいないのだった。

ドミニカの「お使い」とは、そんな場所で彼女が闇市で売る商品を調達する事である。

主な獲物は季節毎の山菜・薬草で、後は運次第でノウサギ等の食用動物である。

幼い頃から一種の兵器として「作られた」イリヤにとって、このような場所を迷わず歩く事は朝飯前も同然であり、食用・薬用関係

に限れば動植物の造詣も深かった。そのためこの街に住居を構えて以降、暇を持て余して外でブラブラしていたイリヤを見かねたドミニカが、半ば強引に頼んできたのがこの「お使い」の始まりだった。なんでもドミニカの話によると、闇市の物売り程度では買い叩かれる事が多いため、自力で商品を手に入れる手段が無いと収支が釣り合わないだとか言う話だそうで、その後色々反論してみたものの、結局上手く言い包められてしまったため、こうして不定期に「お使い」を命じられているのである。

流石に根っからの商売人 交渉術はお手の物か、と適当に考えながらイリヤは樹海を奥へ奥へと進んで行く。

しかし魔性の地と呼ばれるだけあり、いくら歩いても似たような風景が続いている。専門の訓練を受けていない者はその単調な風景に幻惑され、何時の間にか前後左右が分からなくなってしまうらしいが、何度もここに入っているイリヤの頭の中には、既に樹海の大まかな地図が出来ていた。

「ま、しょうがないよな。あいつも、他に頼れる奴がいらないだし」  
考えてみればドミニカのような普通の少女 勿論最低限の護身術は学んでいるだろうが にとつて、いざという時に自分を守ってくれる存在は非常に重要である。特に治安の悪い今の時代では尚更だ。だからドミニカは自分がこんな風であっても許してくれているのかもしれないし、自分もそれに甘えているのかもしれない。

そんな事を考えながら歩いていると……

「ん？」

イリヤは足を止めた。

何か妙な音が彼の聴覚に引っ掛かったからだ。

「……」

咄嗟に手近な大樹の陰に隠れて耳を澄ませると やはり、がさがさと落ち葉を踏み締める音が聞こえる。しかもその音は、イリヤの方に向かって移動しているようだ。

「……獣、だろっな」

音の大きさから推測するに、どうも小動物の類ではなさそうである。それにしてもあまりに音が大きい。距離は20、いや15メートルといった所か。樹海の中はそこまで足場が良い訳ではないが大抵の獣は一瞬で走り抜けてしまふ距離である。

イリヤは獵刀に手を掛けた。

シカやオオカミの類なら狩る事も検討するべきだろうし、クマやオオカミなら上手く逃げるなりやり過ぎすなり、何らかの算段を立てなければならぬ。

万が一にも大型魔獣の類ならば 最悪の事態も覚悟しなければならぬ。

(……ま、その時はその時だ)

イリヤは肚を括り、更に耳を澄ますと

「わぎゃつ!?!」

べしや、と何かが地面に倒れ伏す音と共に、短い悲鳴が聞こえてきた。おそらく人間か獣人の類が 何かに足を引っ掛けて転んだ音だ。

「……………」

意外な形で機先を制されたイリヤは、大樹の陰で僅かに溜め息を漏らした。なんと言うべきか、張り詰めていた気が一瞬で抜けてしまった感じである。

勿論、相手の正体がある程度判明したと言っても自分の正体を不用意にさらけ出す程、イリヤは愚かではない。相手は山賊や追い剥ぎの類なのかもしれないし、この拍子抜けな行動も全て計算づくなのかもしれない。もしもそうなら相手は心理戦に長けたかなりの手練れであり、自分がここに隠れている事も気付かれている可能性が高い。

しばらくは探り合いになるか そう気合いを入れ直すイリヤを嘲笑うかの様に、足音の主はどんどんイリヤの下に近付いてくる。

(ちっ、自信アリって事か)

イリヤは杖を静かに置き、獵刀を抜いた。軍用ではなく狩猟用の

ため、正直頼りないと言えば頼りないのだが、他にまともな武器が無い。

そして足音の主は大樹の反対側に辿り着き、その樹を回り込もうとして、右手で獵刀を構えたイリヤとばかり目を合わせ、驚愕の表情を浮かべて凍り付いた。

「……………あ？」

足音の主と目を合わせたイリヤは、思わず足音の主を見つめた。

本来臨戦態勢時のイリヤにはあり得ない事だったが、そのくらい足音の主の正体が彼の予想外な存在だったからだ。

一言で言えばそれは、人間の少女である。

年齢は16・7といったところか。

例えるなら鴉のような、不吉さと神聖さを併せ持つ妖艶な顔立ちだ。

薄暗い樹海の中で、長い黒髪が微かな木漏れ日を受けて艶やかに靡いている。

大きな蒼い瞳を見開いて怯えている様子は、普通の少女のそれと変わらない。

兎にも角にも山賊や追い剥ぎの類ではないだろう。

それどころかそんな少女に向かって獵刀を突き付けているイリヤの方が、どう見てもそちらの種類の人間である。

こんな少女が一人で樹海の中を彷徨っているのも奇妙な話だが、その格好もまた奇妙であった。黒ローブに大リュック、というだけならそれほど不思議でもないのだが、何故か非常に複雑な造りの杖を持っている。素材は鋼だろうか。その長さは少女の肩くらいなのだが、どうやら中折れ式になっている様で、実際はその倍以上の長さがありそうだ。武器としても杖としても中途半端なその杖は、少女の手の中で鈍い光沢を放っている。

「……………つと、悪いな」

イリヤは獵刀を鞘に戻した。流石に獵刀を構えたままでは、少女

もまともに会話し辛いだろうと判断したからだ。

「こんな所で一体、　　ッ!?」

何をしているんだ、と質問しようとしたイリヤに向かって、少女はその杖をいきなり横薙ぎに振るった。

その攻撃にイリヤが反応出来たのは、その奇妙な杖に注目していたからだった。

僅かに弧を描き、脇腹目掛けて鋼の杖が走る。

杖の重量から推測するに、下手な防御はかえって命取りである。

イリヤは大地を蹴り、後ろに跳んだ。

そして彼が一瞬前に立っていた空間を、少女の振るった鋼の杖が切り裂いた。

「　　ちっ、仕方ない」

イリヤは後ろに滑りながら再び右手で獵刀を抜いた。そっちがその気なら遠慮はしない。とはいえ、あの距離から不意打ちして掠りもしない程度の技量なら、万が一にも遅れを取る事はないだろう。後は適当に杖を奪って戦意を挫けば

がさがさっ。

「あ」

「……………」

イリヤが足元を見ると、その一瞬前に躲したはずの杖が足元に転がって来た。投げてきたとは思えない。という事はすっぽ抜けたのだろうか。確かに無闇に重たい物を振り回せばそうなるのかもしれないが、果たしてそんな馬鹿な奴がいるのか　　？

イリヤは不思議に思いながら少女の杖を拾い上げた。

こうして間近で見ると、ますます奇怪な杖である。

だが、その重量は見た目以上に　　まあそれでもそこそこあるが

軽い。4・5キログラムといったところか。中が空洞になってるのであるう。ともかく、剣や槍の類ともある程度打ち合えそう



な鋼の杖としか言い様がない。複雑な紋章があちこち刻まれている事を考慮すると、儀礼用の杖なのかもしれない。しかしその事實は、少女の膂力が人並みであることを示している。これでは流石に勝負アリだろう。

少女も自分に勝機が無くなった事を理解したのか、絶望の表情を浮かべて突っ立っている。いくらなんでも怯え過ぎだろうと思ったが、まあ出会い方が悪過ぎたか。木陰に忍ぶ謎の獵刀男にしか見えなかっただろうし。

「いきなり何なんだ、一体」

イリヤは再び獵刀を鞘に納め、両手でその杖を持ちながら呆れる様に言った。

「……か、返せ」

イリヤに敵意が無さそうだと判断したのか、それともまた不意討ちしようかと企んでいるのかはいまいち判断出来ないが、少女は僅かに声を振るわせながら言った。

まったく、ここまでもって戦意を挫かれる相手は久し振りである。もう殴りかかってこなければな」

イリヤは溜め息を漏らした。それでもダメなら無視して逃げるしかないが、それもなんだか釈然としないなあという感じである。

「し、しない。しないから」

どうもこの少女の言動には自分を構成しているものを揺さぶる何かがある。居たたまれなくなったイリヤは少女の下まで歩み寄ると、その杖を手渡した。

「ほら」

杖を受け取った少女は、まさかイリヤが正直に返してくると思っていなかったのか、その蒼く澄んだ瞳を丸くして訝しがるように首を傾げた。

「お、襲わないのか？」

「別にそうしても構わないんだが、そんな事したら合わせる顔の無い奴がいてな」

勿論その「合わせる顔の無い奴」とはドミニカだ。

彼女は商売人の割には　むしろ商売人だからなのかもしれないが　潔癖症で、以前樹海の奥で見つけた死体から金目の物を奪った時も、しつこく追及されたものである。

それにイリヤ自身も、それこそ命の危機を感じない限りは、年頃の少女に手荒い真似はしたくないというのが本音である。もっともその理由は、騎士道精神からだとかそういう前向きなものではなく、単純にそういった行為は自分の心的外傷を抉るからという後ろ向きなものなのだが。

しかしこの少女も、相手がそんなイリヤだったから良かったものの、運が悪ければ身包み剥がされて殺されていた可能性もあったのである。そういう意味では、少女の不意討ちは当然の選択とも言える訳で、それを警戒していなかったのはある意味失策である。

少女はイリヤの方をチラチラ見て警戒しつつ、その杖の機構が壊れていないかどうかを確かめるように、杖のあちこちを触りながら言った。

「ふむ。ということは　獵師か？」

獵師か。実際、職業的な獵師を名乗れる程の技量を持っている訳ではないのだが、正直に日頃は無職ですが時々義妹に頼まれて狩りをしてます、なんて言っても話が余計に拗れるだけだろう。

そう判断したイリヤは、とりあえず肯定しておく事にした。

「ま、そんなところだ。あんたは？」

「私は　旅の者だ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5744z/>

---

魔女と忍者と旅商人

2011年12月19日03時10分発行